国立国語研究所学術情報リポジトリ

副詞的要素の分析から見た日英語学習者の特徴とその要因：移動表現における言語化傾向から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-07-12 キーワード (Ja): 移動表現, 事態認識, 副詞的要素, 第二言語習得 キーワード (En): motion event description, conceptualization of events, adverbial elements, second language acquisition 作成者: 眞野, 美穂, 吉成, 祐子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000278

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NoDerivatives 4.0 International License.

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 27: 57–76 (2024) Licensed under CC BY-ND
ISSN 2186-1358

副詞的要素の分析から見た日英語学習者の特徴とその要因
――移動表現における言語化傾向から――

眞野美穂[a]　　吉成祐子[b]

[a] 大阪大学／国立国語研究所 共同研究員
[b] 岐阜大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

移動事象の描写では，何を言語化するかという点において母語における「話すための思考（thinking for speaking）」が第二言語習得に影響を与えていることが指摘されている（Slobin 1996）。本稿では，移動事象を描写する言語産出実験で得られたデータを元に，日英語母語話者と学習者の副詞的要素の使用を比較することで，各話者の特徴を探ると共に，その要因を検討する。これまであまり重視されてこなかった副詞的要素を各言語間（日本語母語話者の日本語・英語，英語母語話者の英語・日本語）で比較し，分析することによって，より詳細に移動の様子（様態）を描写しようとする英語母語話者の傾向が，学習言語においても見られることがわかった。また，目標言語の母語話者の表現と，学習者言語同士を比較することによって，使用可能な要素でできる限り表現しようとする学習者共通のストラテジーについても明らかになった。本稿では，副詞的要素の分析が話者の事態認識のさらなる解明につながる可能性を示す *。

キーワード：移動表現，事態認識，副詞的要素，第二言語習得

1. 序論

本稿の目的は，移動事象を描写する際の日英語学習者の言語化傾向の特徴を，副詞的要素の使用に注目して分析するものである。これまで，移動表現の類型論に基づいた第二言語習得研究では，類型の異なる学習言語を学ぶ際の難しさについて指摘するなど，様々な研究がなされてきた（Cadierno 2004, Cadierno & Robinson 2009, Hendriks & Hickmann 2011, Inagaki 2001, 稲垣 2010, Spring & Horie 2013）。これらの研究では，学習者が移動事象に関わる概念（以降，移動事象概念）をどのように表現するのか，母語のパターンとは異なるのかを中心に分析されているが，主に主要部（主動詞）で経路を表すか否かに焦点が当てられている。

本稿では，文の必須要素ではないことからこれまで重要視されてこなかった，副詞的要素の使用傾向に注目する。ここでいう副詞的要素とは，動詞を修飾する任意の諸要素のことであり（副詞節は除く），副詞（句）に限らない（以降，副詞的要素には下線を引く）。そのため，（1a–b）のような副詞句だけではなく，（1c–d）のような任意の前／後置詞句等も含む（詳細は 3 節に記載する）。

* 本稿は，社会言語科学会第 46 回大会で行った発表「母語話者と学習者の日英語移動表現における事態認識―副詞的要素の使用から―」に，加筆修正を行ったものである。発表時，そして査読者からの有益な助言に感謝申し上げる。また，本稿は，国立国語研究所の共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」（プロジェクトリーダー：浅原正幸）のサブプロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」（プロジェクトリーダー：松本曜），そして JSPS 科研費（JP15K02753, JP21K00761）の研究成果の一部である。

（1） a. My friend jogs slowly into the pavilion.
b. 友達がゆっくりと階段をのぼっていった。
c. The guy ran on the path to the bicycle.
d. 友人が小走りで階段を上がった。

移動事象を描写する言語産出実験から得られたデータのうち，日本語と英語の各母語話者と各学習者の表現を取り上げ，どのような概念がどのように副詞的要素で表出されているのかを観察する。類型の異なる二言語を複合的に比較することで，各言語学習者個別の，あるいは共通の特徴と，それが生じる要因を探る。

2. 先行研究の概観

2.1 移動表現における経路表示の類型論

移動事象には移動物（Figure）や移動の経路（Path），移動の様態（Manner）など，様々な意味概念が含まれており，それらがどのような言語形式で表されるのかは言語によって異なることが知られている。Talmy（1991, 2000 他）は，移動事象概念のうち，経路がどのような言語形式で表されるのかに注目し，言語を分類している。そして，（2）で示す日本語のように，経路を主動詞で表す言語を「動詞枠付け言語（verb-framed languages）」，（3）で示す英語のように，動詞以外の要素（（3）では前置詞）で表す言語を「付随要素枠付け言語（satellite-framed languages）」と名付けている。

（2） 彼は スキップして 部屋 - **に** **入った**。
Figure Manner Ground-**Path** **Path**
（3） He skipped **into** the room.
Figure Manner **Path** Ground

これは，主動詞にどの意味概念が包入されるのかにも関わり，典型的には動詞枠付言語では経路が，付随要素枠付け言語では様態が主動詞で表される。ただし，（2）のように，動詞枠付け言語でも経路を動詞以外の要素（（2）では格助詞）でも表すことがある。松本（2017a）は，このような複数箇所での経路表示も考慮し，Talmy の類型論では誤解を招きやすかった「動詞」という呼び名を「主動詞（主要部）」としてとらえなおした枠組みを提唱している。そして，より厳密に経路表示位置を検討し，主に経路を主要部で表す言語を「経路主要部表示型言語」，前置詞や副詞など主要部以外（主要部外要素）で表す言語を「経路主要部外表示型言語」と呼んでいる。本稿では，経路を主要部と主要部外要素で表すなど，複雑な経路表示を行う日本語を対象とすることから，松本（2017a）の用語に従う。

本稿が対象とする英語は，主要部外要素で経路を表す，典型的な経路主要部外表示型言語である。経路はどのような移動事象であっても，基本的に項として，（3）のような前置詞句や不変化詞（particle）で表される（Talmy 1991，松本 1997, 2017b など）。副詞（e.g. *upstairs*）や動詞（e.g.

enter）で経路を表すことも可能であるが，その頻度は低いことが報告されている（松本 2017b）。それに対し，様態は基本的に主要部である動詞（e.g. *skip*）で表されるが，副詞的要素（e.g. *slowly, on foot*）が用いられる場合もある。

一方日本語は，主に経路を主要部で表す経路主要部表示型言語である。しかし，経路が常に主要部で表されるわけではない（Matsumoto 2018）。（2）で見たように，主要部外要素でも経路を表すことがある。経路局面を後置詞で示すだけでなく，「中に・外から・上へ」のように，位置名詞に後置詞を付加する形で，位置関係と経路局面を組み合わせた形が使用されることもある（松本 2017c）。また，「階段をのぼる・橋の下を通る」のような通過領域の表現では経路表示に主要部外要素を用いないという，経路局面の種類による違いもある。さらに，経路を表す動詞は主動詞として使われるほか，「**のぼって**いく・**入って**くる」のように，複雑述語の前項動詞（この位置を「準主要部」と呼ぶ[1]）として用いられることが多い（古賀 2017，松本 2017b）。様態は主要部外要素で表されることが多く，「**スキップしながら**／**走って**部屋に入ってきた」のような動詞の活用形，「駆け足で」のような後置詞句などが用いられる。

移動表現における類型については，母語だけではなく第二言語においても盛んに研究が行われてきた。日英語のように類型が異なる言語を母語とする学習者と，類型を同じくする学習者との比較により，習得における類型の影響の有無（Cadierno & Robinson 2009, Inagaki 2001, Spring & Horie 2013, 吉成他 2021 など）を議論するものが多い。その中で，異なる類型の言語習得の難しさや（Cadierno & Ruiz 2006, Inagaki 2001, Spring & Horie 2013 など），省略や簡略化を行う学習者言語の共通した特徴（吉成他 2021 など）などが指摘されてきた。しかし，これらの研究では，主に経路などの移動事象概念をどこで表すか，または主動詞で何を表すか，などに焦点が当てられてきたため，副詞的要素に着目した研究はほとんど行われてこなかった。

2.2 移動事象の認識と言語化

移動表現では，どのような概念をどのくらい習慣的に表現するかが，言語によって異なることも知られている。Slobin（1996, 2004）は，同じ出来事の描写に使われる表現を比較すると，ロシア語や英語のような付随要素枠付け言語の話者のほうが動詞枠付け言語の話者よりも，様態の表示を頻繁に行う傾向を明らかにし，「様態の卓立性」を指摘した。このような傾向が見られるのは，話者が事象を言語化する前の認識の段階で，習慣的に事象のどの側面に注目するかが各言語話者で異なるためであるとし，このような認識プロセスを，「話すための思考（thinking for speaking）」（Slobin 1996）と呼んでいる。移動事象の言語化においても，移動事象概念をどのくらい習慣的に表現するかが言語によって異なっており，それが第二言語にも影響することを主張している。また，様態だけではなく，ダイクシスの表示においても言語間で表示頻度に差があることが指摘されており，日本語はダイクシスを高い頻度で表現する言語だとされ（古賀 2017 など），第二言語においてもその影響が観察されることが，吉成他（2021）でも報告されている。

[1]「準主要部」という用語は，松本（2017a）による。

経路について，Ibarretxe-Antuñano（2009）は，諸言語における経路の卓立性を 1 つの節で表現される経路の数から提案している。

また，移動事象をどのような構造を用いて表現するかについても，言語間の差異が指摘されている（Bohnemeyer et al. 2007）。英語などの言語では，（4）のように 1 つの節で複数の前置詞句などを用いて，複数の参照物が関わる一連の経路を表現するのに対して，（5）の日本語のように節を分けて表現する言語もある（Ibarretxe-Antuñano 2009, 吉成他 2020）。

（4） My friend kicks a ball through a bench to a goal in a garden.
（5） 友達がボールを蹴って，ベンチの下をくぐらせ，ネットの中に入れた。

このように，どのような意味概念を表出するのか，そしてそれをどのように表現するかは言語ごとに異なり，そこに各言語話者の特徴が現れると言えるだろう。

2.3 学習者の副詞的要素の使用

本稿で扱う副詞的要素に含まれる副詞は，言語教育や第二言語習得研究において，あまり焦点を当てて取り上げられることのない品詞であると考えられる。英語教育においては文法項目として取り上げられることは少なく，副詞については語としての意味の教授が中心となっている現状がある。日本語教育においても，副詞は語彙レベルでの導入に留まっていることが多く，副詞を取り立てて指導することは少ない。日本語教科書で取り上げられている副詞を調査した大関（1993），朴（2019，2022）は，扱われる副詞の種類に偏りがあることも明らかにしている。

第二言語習得研究に目を向けても，日本語学習者の程度副詞使用など，使用される副詞の種類などを取り上げる研究（胡 2020）や，個別の副詞の使用傾向を見る研究など（Ogata & Kawamura 2014，藤本 2017, 2018, 2020 など）はある程度存在するが，学習者が副詞を使用する際に見られる全般的な特徴の研究は，他の品詞に比べると，非常に少ない。これには，副詞という品詞が統一的な性質を持たない雑多な語からなる集まりであることも影響している。

移動表現研究においても，これまで注目されてきたのは，経路や様態などの移動事象に関わる概念が主要部である動詞で表されるのか，主要部外要素で表されるのかという点であった。さらに，主要部外要素については，着点や起点といった経路概念を表す前置詞（e.g. *into (the room)*, *from (the station)*）などについて取り上げる研究は多いものの（Bohnemeyer et al. 2007, Ibarretxe-Antuñano 2009），様々な概念を表す副詞やそれ以外の副詞的要素に焦点を当てた分析が行われることはあまりなかった。これは母語，学習者言語共に言えることである。

しかし，副詞的要素の役割に注目し，分析することは重要である。副詞的要素は，基本的に修飾要素であり，文に必須の要素ではなく，種類にもよるが，出現位置の自由度も高いという特徴がある。これらの性質ゆえに，そこであえて表出する意味概念に，母語話者の事態認識の特徴や，学習者の特徴が現れる可能性は高いと考えられる。そのため，本稿では副詞的要素に着目する。

3. 言語産出実験

本研究は，国立国語研究所の共同研究プロジェクト「空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究」（プロジェクトリーダー：松本曜）に端を発するMEDAL（Motion Event Descriptions Across Languages）プロジェクトにおいて使われてきたビデオ実験プログラムを用いたものである。本稿では，様々な移動事象からなる52の映像を見せて口頭で描写させる産出実験のデータを，副詞的要素に着目して分析する。映像には，自立移動や使役移動などを含む様々な移動事象が含まれており（詳細は後述），実験はパソコンを使用して行われた。指示はすべて画面上で示され，参加者はその指示通りに移動事象についての描写を行った。録音されたデータは文字化し，分析が行われており，言い直しがあった場合は，最後の発話のみを採用している。

表1は，本稿が対象とする言語と参加者をまとめたものである。言語名を表す最初のアルファベットは回答言語（英語Eまたは日本語J）を，そしてL1は母語，L2は学習言語を，そして( )内には話者の母語を示している。例えば，「E-L2(j)」は，日本語母語話者の英語を表す。

表1　各言語の実験参加者とその属性

言語／属性	E-L1	E-L2(j)	J-L1	J-L2(e)
回答言語	英語		日本語	
母語（L1）	英語	日本語	日本語	英語
参加者数（男 / 女）	23（11/12）	15（8/7）	22（10/12）	15（8/7）

学習者は全て中級であり[2]，日本語母語話者の英語（E-L2(j)）については眞野が，英語母語話者の日本語（J-L2(e)）については吉成・眞野が，それぞれデータ収集と分析を担当している。そして，比較のために，上記プロジェクトで得られた母語話者データ（英語：E-L1，日本語：J-L1）を利用する[3]。

本稿が分析対象とする場面は，52場面中，異なる経路・様態・ダイクシスの組み合わせから成る，27場面の自立移動事象（経路 TO/UP/TO.IN × 様態 WALK/RUN/SKIP × ダイクシス TOWARD-SPEAKER (TWRD-S)/AWAY-FROM-SPEAKER (AWY-FRM-S)/ORTHOGONAL (ORTHOG)）である。次の図1～3がその映像の例である。なお，実験の場面については，それぞれの移動事象概念の組み合わせを，| | で示す。

[2] 学習者のレベルについては，CEFRの基準からどちらもB1レベルと判断し，共に中級レベルと位置付けた。
[3] 本研究の主たる対象は第二言語であり，そのための比較として，母語話者のデータを用いている。母語話者データの収集・分析担当者はそれぞれ，英語（秋田喜美・松本曜・眞野美穂），日本語（吉成祐子・古賀裕章）であり，母語話者データの分析結果については，古賀（2016），吉成（2017），Koga（to appear），Tanigawa, Takahashi & Matsumoto（to appear）等を参照されたい。

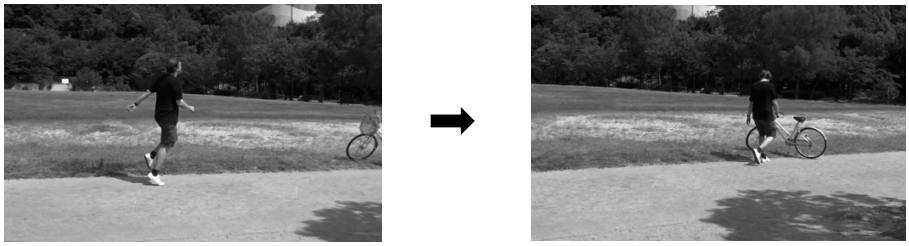

図 1　|TO × SKIP × ORTHOG|

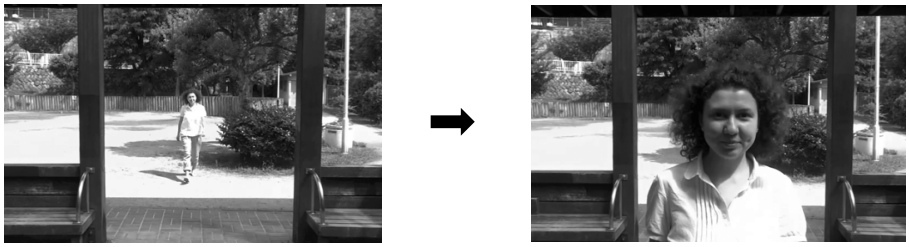

図 2　|TO.IN × WALK × TWRD-S|

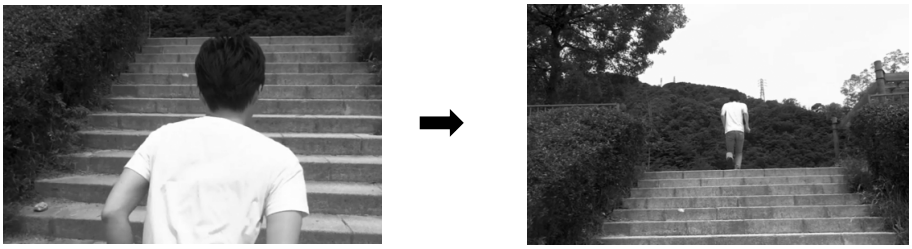

図 3　|UP × RUN × AWY-FRM-S|

日英語の母語話者の移動事象表現の分析結果については，古賀（2016），吉成（2017），Koga (to appear)，Tanigawa, Takahashi & Matsumoto (to appear) がすでに，各移動事象概念（経路・様態・ダイクシス）に焦点を当て，それぞれの表示位置（主要部・主要部外要素）や言語間の差異にも着目し，分析を行っている。

本稿では，これまで注目されていなかった副詞的要素について，新たに分析を行った。得られたデータを，（6）～（9）のように，副詞的要素に着目して，それらの形式と表す意味概念を分析した。移動事象を描写する際には，参照物の場所を述べる文など，移動表現以外の表現も含まれているが，それらも分析対象とし，そこで使用された副詞的要素も含めている。日英語において副詞的要素として扱ったのは，動詞を修飾する任意の要素（副詞節は除く）であり，品詞としては，副詞（句），前／後置詞句，名詞句や句副詞である。そして，それぞれがどのような意味概念（例：様態，場所，経路など）を表すのかを文中で判断した。英語は眞野が，日本語は吉成

が，分析を担当した。（6）～（9）はそれぞれ，E-L1, E-L2(j), J-L1, J-L2(e) からの回答例とその分析例である。また，学習者の回答には，非文法的な文も含まれているが，「*」は付さず，そのまま提示することとする。

（6） a. He stops looking at me and runs into the pavilion quite energetically.
様態（副詞句）
（E-L1, |TO.IN × RUN × AWY-FRM-S|）

b. My friend skips slowly up the stairs. （E-L1, |UP × SKIP × ORTHOG|）
様態（副詞）

（7） a. My friend is skipping at the stairs. （E-L2(j), |UP × SKIP × ORTHOG|）
場所（前置詞句）

b. My friend is running up the stairs fast. （E-L2(j), |UP × RUN × ORTHOG|）
様態（副詞）

（8） a. 友人は ゆっくり 階段を のぼって 私の所に きた。（J-L1, |UP × WALK × TWRD-S|）
様態（副詞）

b. 友人が スキップで 休憩所に 入って - きた。（J-L1, |TO.IN × SKIP × TWRD-S|）
様態（後置詞句）

（9） a. 友達は 道で スキップした。（J-L2(e), |TO × SKIP × ORTHOG|）
場所（後置詞句）

b. 友達は おかしい歩き方で 階段を のぼりました。
様態（後置詞句） （J-L2(e), |UP × SKIP × AWY-FRM-S|）

c. 友達は はやくに 階段を のぼった。 （J-L2(e), |UP × RUN × AWY-FRM-S|）
様態（副詞）

英語では，副詞的要素として，（6b），（7b）のような単独の副詞や，（6a）のような副詞句，（7a）のような前置詞句（e.g. *in a hurry*）に加え，名詞句（e.g. *this time*）や句副詞（e.g. *sort of*）などが含まれる。日本語では，（8a），（9c）のような副詞や，副詞句（例：かなり速く），（8b），（9a, b）のような後置詞句を副詞的要素に含めている。なお，学習者の表現には（9c）のような文法的な間違い（例：はやくに，うれしくに，など[4]）も見られたが，このような誤用も含めて考察した。

本稿は，移動事象を描写する際に用いられる副詞的要素の特徴を探ることが目的であるため，動詞を修飾する副詞的要素を対象とした。副詞の中で，接続副詞（e.g. *however, and then*）などは対象から外し，時間副詞（e.g. *now*）や，動詞句を修飾するもの（e.g. *just*）は含めている。例えば，（10a）の *fairly slowly* は〈様態〉を表す副詞句とみなし，太字にしている *further* は，動詞ではなく，

[4] 日本語の場合，副詞という文法範疇が英語ほど明瞭ではなく，形容詞のク形（例：早く），形容動詞のニ形（例：しずかに）は「副詞的表現」（仁田 2002，影山（編）2009）と呼ばれている。そのため，本稿では副詞に含める。

down the path を修飾していることから，分析の対象となる副詞的要素ではない。日本語の（10b）では，「少し小走りで」を，〈様態〉を表す副詞的要素として扱っている。

（10） a. He skips fairly slowly towards a bicycle **further** down the path.
様態（副詞句） （E-L1, |TO × SKIP × ORTHOG|）
b. 友人が 少し小走りで 階段を上がった。 （J-L1, |UP × WALK × AWY-FRM-S|）
様態（後置詞句）

以上のように，動詞を修飾する副詞的要素の形式，およびそれが表す意味概念がどのようなもので，それらがどのくらい用いられているかを調査した。

4. 結果と考察

4.1 副詞的要素での表出

まず，各言語でどのくらい副詞的要素を使用しているのか，1 人あたりの平均使用頻度（27 場面合計）を見てみよう。図 4 に各言語の使用頻度を比較した結果をまとめている。副詞的要素は文に必須の要素ではないことからも，全体的に使用頻度はそれほど多くはなかったが，言語間での差異が観察された。

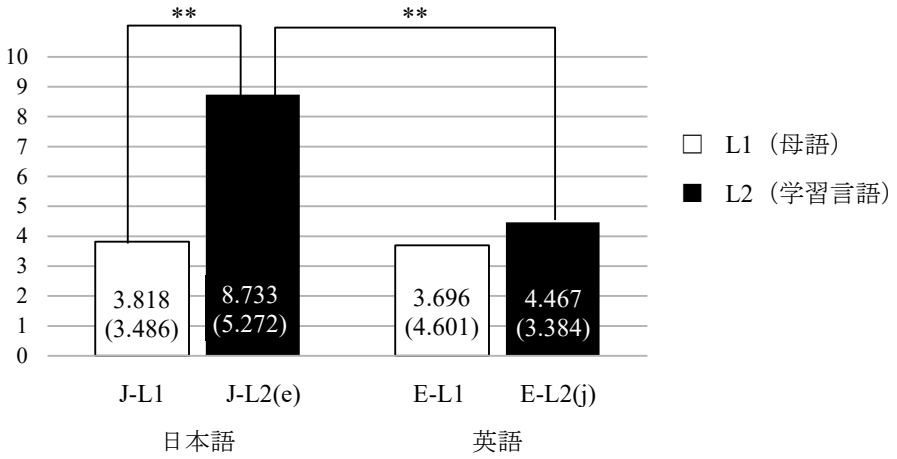

図 4 言語別 1 人あたりの副詞的要素の平均使用頻度（27 場面合計，( ) 内は標準偏差）
** $p < .005$

これを見ると，J-L2(e) における使用頻度の高さが目立つ。2 要因（回答言語：日本語／英語，母語か学習言語か：L1 ／ L2）の分散分析を行った結果，回答言語（$F(1, 71) = 4.583, p < .05$）と母語か学習言語か（$F(1, 71) = 7.691, p < .01$）で，それぞれ主効果が見られた。交互作用が有意であったため（$F(1, 71) = 4.085, p < .05$），交互作用による単純主効果を検定したところ，L2 における回答言語間（$F(1, 71) = 8.661, p < .005$），日本語における L1 と L2 間（$F(1, 71) = 11.494, p < .005$）で有意差が見られた。これは，J-L2(e) の副詞的要素の使用頻度が有意に突出して高いことを意味

する。

副詞的要素は基本的に任意の修飾要素であるため，個人差がある可能性が考えられる。図 4 の各言語での標準偏差を見てみると，英語では L1 のほうが L2 よりも個人差が大きく，日本語では L2 のほうが L1 よりも個人差が大きいことがわかった。E-L1 の個人差は，全く副詞的要素を使用しない人が 23 人中 7 人いたことによる影響だと考えられる。J-L2(e) では全員が副詞的要素を使用しているものの，27 場面中 1 回しか使用しない人もいれば，20 回使用している人もおり，極端に使用頻度が高い個人が目立った。

次に，副詞的要素が表す意味概念について見ていきたい。表 2 は，27 場面全回答で使用された副詞的要素を合計し，それらが表す意味概念ごとに数値をだし，1 回答あたりの平均使用頻度をまとめたものである。意味概念は，移動事象に関わるものかどうかに大きく分けて，示している。

表 2　各意味概念を表す副詞的要素別 1 回答あたりの平均使用頻度と割合

言語＼意味		移動事象概念		移動事象概念以外			合計
		経路	様態	場所	時間	その他	
英語	E-L1	0.003 （2.4%）	0.032 （23.5%）	**0.055** **（40.0%）**	0.011 （8.2%）	**0.035** **（25.9%）**	0.137 （100%）
	E-L2(j)	0 （0%）	0.015 （9.0%）	**0.116** **（70.1%）**	0.005 （3.0%）	0.030 （17.9%）	0.165 （100%）
日本語	J-L1	0.002 （1.2%）	**0.111** **（78.6%）**	0.003 （2.4%）	0 （0%）	0.037 （17.9%）	0.207 （100%）
	J-L2(e)	0.002 （0.8%）	**0.161** **（49.6%）**	0.104 （32.1%）	0.015 （4.6%）	0.042 （13.0%）	0.323 （100%）

まず母語話者の表現に注目すると，副詞的要素で表出する概念が，日英語間で異なることがわかる。英語（E-L1）では，移動事象概念以外を表出することが多く，日本語（J-L1）では移動事象概念（特に〈様態〉）の表出が多い。

英語では，付加的な概念を表出するのに副詞的要素が用いられることが多く，特に E-L1 では，〈場所〉や，〈その他〉に含まれる程度（e.g. *at least*）や強調（e.g. *just*）などを表すものが多く使用されていた。経路主要部外表示型の英語では，(6a–b）や（10a）のように，〈様態〉は主動詞で，〈経路〉は項として表現されることが多い。そのため，副詞的要素では，それ以外の概念（(11a）では〈場所〉）を表すか，もしくは移動事象概念を重複させる形で（(11b）では〈様態〉が動詞と前置詞句で表されている），より詳しく表現することになる。

（11）　a.　My friend skipped <u>on a path</u> towards his bicycle.　（E-L1, |TO × SKIP × ORTHOG|）
　　場所

　　b.　My friend ran up the stairs <u>in a hurry.</u>　（E-L1, |UP × RUN × ORTHOG|）
　　様態

一方，経路主要部表示型の日本語では，（8b）の「**入って** - きた」のように，〈経路〉は（準）主

要部で表されることが多く，〈様態〉は（2）のテ形のような動詞の活用形や，（8a, b）のような副詞や後置詞句といった主要部外要素で表されることになる。そのため，副詞的要素で表す意味概念が，〈様態〉であることが多いのは当然の結果とも言える。

次に母語か学習言語かの違いに注目すると，英語でも日本語でも，L1 と L2 間で違いがあることがわかる。英語では，L1・L2 間で平均使用頻度に有意差は見られなかったが（図 4 参照），表 2 から，表す意味概念には差異が見てとれる。E-L1 では副詞的要素で〈様態〉を表す割合が E-L2(j) より高く，E-L2(j) では〈場所〉が占める割合が E-L1 より高い。日本語では，L1 よりも L2 のほうが有意に多く副詞的要素を使用するという差異があった（図 4 参照）。そして，表す意味概念の種類に関しても，J-L1 は〈様態〉が大きな割合を占めるのに対し，J-L2(e) は〈様態〉の割合だけでなく，〈場所〉の割合も大きいという違いがあった。〈時間〉も，J-L2(e) だけに見られる使用である。次節以降で英語・日本語別に詳しく観察し，学習者の特徴を分析する。

4.2 英語学習者の特徴

まず，英語における母語話者の表現（E-L1）と学習者の表現（E-L2(j)）を比較する。4.1 節で明らかにされたように，1 人あたりの平均使用頻度や表出する概念の種類については，E-L1 と E-L2(j) の間に大きな違いは見られなかったが，副詞的要素で表す意味概念の傾向に関しては差異が見られた。さらに詳しく英語学習者が使用する副詞的要素の特徴を探るため，まず表 3 では，副詞的要素の形式別に 1 回答あたりの平均使用頻度とそれぞれの割合を示す。

表 3　副詞的要素の言語形式別 1 回答あたりの平均使用頻度と割合（英語）

属性＼言語	前置詞句	単独の副詞	副詞句	その他（名詞句・句副詞）	合計
E-L1	0.064（47.1%）	0.053（38.8%）	0.011（8.2%）	0.008（5.9%）	0.137（100%）
E-L2(j)	**0.148（89.6%）**	**0.017（10.4%）**	0（0%）	0（0%）	0.165（100%）

表 3 から，E-L1 では多様な言語形式の副詞的要素の使用が観察される一方で，E-L2(j) では前置詞句と単独の副詞の使用しか観察されず，E-L2(j) が使用する形式は限定的であることがわかる。

次に，表 4 ではより詳細な意味概念別に（表 2 に〈その他〉の内訳を加えている），1 回答あたりの平均使用頻度と割合を示す。

表 4　各意味概念を表す副詞的要素別 1 回答あたりの平均使用頻度と割合（英語）

属性＼言語	移動事象概念		移動事象概念以外						合計
	経路	様態	場所	時間	その他				
					程度	強調	回数	その他	
E-L1	0.003（2.4%）	**0.032（23.5%）**	**0.055（40.0%）**	0.011（8.2%）	0.010（7.1%）	0.014（10.6%）	0.008（5.9%）	0.003（2.4%）	0.137（100%）
E-L2(j)	0（0%）	0.015（9.0%）	**0.116（70.1%）**	0.005（3.0%）	0（0%）	0（0%）	0.002（1.5%）	0.027（16.4%）	0.165（100%）

表 4 から，E-L1 では多様な意味概念が副詞的要素で表されていることがわかる。最も多く観察されたのは，（12a）のような〈場所〉を表す前置詞句であった。次が，〈様態〉を表す *slowly* のような単独の副詞句や，さらにそれを程度副詞で修飾した（12b）のような副詞句であった。また，（12c）のような〈強調〉や，（12d）のような〈回数〉を表す副詞的要素も，ある程度観察された。

（12） a. My friend walks up to me on the path. （E-L1, |TO × WALK × TWRD-S|）
b. He stops looking at me and runs into the pavilion quite energetically. （E-L1, |TO.IN × RUN × AWY-FRM-S|）
c. The runner guy just ran up to me and in a pavilion. （E-L1, |TO.IN × RUN × TWRD-S|）
d. He's skipping up to me again. （E-L1, |TO × SKIP × TWRD-S|）

一方，E-L2(j) では，副詞的要素で表す意味概念は〈場所〉を表すものが大部分を占め，種類も少なかった。また，表 3 で見たように，副詞句は観察されず，限定された前置詞句のみ（e.g. *in front of me, on the path, at the steps* など）を繰り返し使用するという傾向もあった。母語である日本語の母語話者表現（J-L1）では，ほとんど〈場所〉を表す副詞的要素は観察されておらず（表 2 参照），母語の影響ではないことがわかる。さらに，限られた話者が同じ語句を繰り返し使う傾向も見られた。例えば，*on the path* という前置詞句は，全体で 13 例の使用が観察されたが，それらは 3 人の話者によるものであった（それぞれ，7 回，5 回，1 回の使用）。このような偏りは，多様な表現を使用する E-L1 とは異なる特徴と言える。

また，着目すべき特徴として，〈場所〉を表す副詞的要素 47 例中 17 例（36.2%）が階段をあがる場面で使われており，そのうち，14 例では上方向への経路が表現されていなかったことがあげられる。上方向への経路を表す方法がわからず，（13a, b）のように場所句として表現した可能性が考えられる。

（13） a. He is running at the steps. （E-L2(j), |UP × RUN × AWY-FRM-S|）
b. My friend skips on stairs toward me. （E-L2(j), |UP × SKIP × TWRD-S|）

また，副詞的要素として示された〈場所〉と共に，上方向の経路を表現していた場合も，E-L1 が頻繁に使用する *up* を使用した経路表現ではなく，*to* を使った（14）のような経路表現のみが観察された（いずれも項であり，副詞的要素ではない）。これらの学習者には，（15）の E-L1 の表現のような，*up* を使用し，参照物を取り，経路項を表す方法が完全には習得されていないと考えられる（吉成他 2021）[5]。

（14） My friend is skipping at the stairs from the bottom of stairs **to the top of stairs**. （E-L2(j), |UP × SKIP × TWRD-S|）

（15）（＝（6b）） My friend skips slowly **up the stairs**. （E-L1, |UP × SKIP × ORTHOG|）

[5] 吉成他（2021）でも，英語学習者にとっての *up* の前置詞用法の難しさは指摘されているものの，場所句との関係は議論されていない。

副詞的要素で表す移動事象概念に関しては，E-L1, E-L2(j) 共に，〈様態〉がある程度観察されたが，その場合，主動詞ではどのような意味概念が表されているのだろうか[6]。先に述べたように，E-L1 では，通常〈様態〉は主動詞で表されることが多いことが，これまで指摘されてきた（松本 2017b，吉成他 2021 など）。そのため，副詞的要素で〈様態〉を表した回答（E-L1: 20, E-L2(j): 6）について，主動詞がどのような意味概念を表しているかを確認した。つまり，様態動詞と共に用いられ，重複して〈様態〉を表しているのか，それ以外の移動動詞（経路動詞，ダイクシス動詞）と共起し，〈様態〉は副詞的要素のみで表しているのかに注目し，分析をおこなった。それぞれの表示パターンの使用回数と割合を，表 5 にまとめる。

表 5　様態を表す副詞的要素の各表示パターンの延べ使用回数と割合
（27 場面合計）（英語）

パターン／言語	重複表示（様態動詞あり）	単独表示（様態動詞なし）	合計
E-L1	19（95.0%）	1 （5.0%）	20（100%）
E-L2(j)	3（50.0%）	3（50.0%）	6（100%）

表 5 からわかるように，E-L1 では，該当するほとんどの回答の主動詞は様態動詞であり，副詞的要素でさらに〈様態〉を詳しく表現する，つまり二箇所で〈様態〉を表示する，（16）のような文であった。一方，〈様態〉を表す副詞的要素が様態動詞以外と共に使用された（17）のような例は 1 例のみであった（（17）の主動詞は経路動詞）。

（16） My friend happily **skipped** into the pavilion. （E-L1, |TO.IN × SKIP × AWY-FRM-S|）

（17） My friend **climbed** up the stairs, I guess, slightly fast, and he was very happy, because he had a big smile. （E-L1, |UP × RUN × TWRD-S|）

英語で様態を表す修飾要素がよく似た意味の様態動詞と生じ，詳細に描写する傾向は，Özçalışkan & Slobin（2003），Slobin et al.（2014）でも指摘されており[7]，本稿でも同様の傾向が見られた。

一方，E-L2(j) では，（18a）のように，〈様態〉を表す副詞的要素を様態動詞と組み合わせ，重複して〈様態〉を表示している例（3 例）だけではなく，（18b, c）のように，経路動詞やダイクシス動詞と共に使用されているものも 3 例観察された。後者の場合，主動詞で表現しなかった〈様態〉を，副詞的要素で表出したものと考えられる。

（18） a. My friend is **running** up the stairs fast. （E-L2(j), |UP × RUN × ORTHOG|）

b. My friend is **climbing** up the stairs fast. （E-L2(j), |UP × RUN × TWRD-S|）

c. My friend **comes** to me on foot. （E-L2(j), |TO × WALK × TWRD-S|）

[6] 吉成他（2021）では，各言語の主動詞で現れる意味概念を検討しているが，本稿では副詞的要素で様態を表している回答のみを対象としているため，その一部になる。
[7] 英語と同様に経路主要部外表示型言語であるエストニア語でも，同じ傾向が観察されることが報告されている（Taremaa & Kopecka 2023）。

ただし，それぞれ数は少ないため，学習者の特徴かどうかを検証するためには，よりデータを増やした調査が必要である。

このように副詞的要素を観察すると，E-L1 は，〈様態〉を二箇所で描写したり，〈時間〉や〈強調〉を含め，より出来事を詳細に述べるために副詞的要素を使用していた。それに対し，E-L2(j) は，意味的にも形式的にも限られた副詞的要素しか用いない傾向が見られた。一番多く観察された〈場所〉を表す副詞的要素の中には一部，〈経路〉を適切に表すことができず，場所句として表現していると考えられるものが含まれていた。これらのことから，英語学習者は副詞的要素を英語母語話者と同様には使えていない現状と，異なる目的で使用している場合があることがわかった。

4.3 日本語学習者の特徴

次に，日本語における母語話者の表現（J-L1）と学習者の表現（J-L2(e)）を比較する。4.1 節で見たように，英語とは異なり，日本語では J-L2(e) の方が J-L1 よりも圧倒的に副詞的要素の使用頻度が高かった。そして，どのような意味概念を副詞的要素で表しているのかについても違いがあった。J-L1 で使用される副詞的要素は〈様態〉を表すものがほとんどであったが，J-L2(e) ではそれだけでなく，〈場所〉や〈時間〉を表す副詞的要素の使用も見られた（表 2 参照）。

まず，J-L2(e) の〈場所〉や〈時間〉を表す副詞的要素の使用を見てみよう。例えば，（19）や（20）のような〈場所〉を表すもの，（21）のような〈時間〉を表すものが用いられていた。ただし，後者については，6 例中 5 例が 1 人の学習者が使用した結果であった。

（19） 友達は階段で走った。 (J-L2(e), |UP × RUN × AWY-FRM-S|)
（20） 友達は道で自転車のところに走った。 (J-L2(e), |TO × RUN × ORTHOG|)
（21） 友達が自転車までずっとスキップしました。 (J-L2(e), |TO × SKIP × ORTHOG|)

J-L2(e) の，〈場所〉を表す副詞的要素の使用が特に目立っていたが，使用されていたのは「道で」と「階段で」がほとんどで，E-L2(j) でも *on the path*, *at the step* が頻繁に使用されていたのと同様である。しかし，J-L2(e) での〈場所〉を表す副詞的要素の使用には，誤用も含まれていることに注意しなければならない。「* 階段でのぼった」のような誤用（〈場所〉を表した回答 42 例中 9 例）である。これは，「階段**を**のぼった」とするべきところであり，このような助詞の間違いは学習者ではよく見られる。様態動詞との共起例である（19）は非文ではないものの，上方向の経路（UP 経路）は無視された表現となっている。日本語では，上下方向の経路は動詞で表示されることがほとんどだが，「階段を上｛に / まで｝走った」のように，UP 経路を表すことはできる。しかし，場所を表す後置詞句「階段で」を使用している限り，非文となったり（* 階段で上に走った），可能な場面は限られたりする（（東側ではなく）西側の階段で上まで走った）。（20）のような TO 経路は場所を表す後置詞句「道で」と共起しても非文とはならない。このように，移動事象の描写において，〈場所〉を表す副詞的要素の使用には経路によって学習上の難しさが伴う。

J-L1 では〈場所〉を表す副詞的要素の使用は，1 人の参加者による 2 例のみであり，うち移動動詞との共起は（22）の 1 例で，もう 1 例は（23）のように，移動の場所を示すものではなかった。

（22） 友人が道でスキップしながら，私に近づいてきました。
（J-L1, |TO × SKIP × TWRD-S|）

（23） 階段の下で 一緒に 話していた友人が，向きを変えてスキップをしながら階段をのぼっていきました。 （J-L1, | UP × SKIP × AWY-FRM-S|）

このような移動動詞と〈場所〉を表す副詞的要素との共起がほぼ見られない J-L1 の傾向を見ると，日本語の移動事象の描写において〈場所〉の情報は重視されないものに思える。一方，J-L2(e) で〈場所〉の表出が多かったことは，母語である英語（E-L1）の影響の可能性がある。E-L1 では多様な意味概念が副詞的要素で表されていたが，最も多かったのは〈場所〉を表すものであった（表 2 参照）。〈場所〉を表示するという母語での「話すための思考」が，第二言語である日本語の使用においても影響したと考えられる。

以上，J-L2(e) の〈場所〉を表す副詞的要素の使用において，誤用が含まれること，母語の影響の可能性を指摘した。これらを総合すると，どのような概念を表示するかという母語での「話すための思考」が学習言語での移動事象の描写においても影響し，言語体系の違いもあることから，それが負の影響となり，習得の難しさにつながっていると考察される。

次に，〈様態〉を表す副詞的要素について見てみよう。J-L1, J-L2(e) 共に，使用割合は最も高かったが（表 2 参照），使用された様態の表現を見ると様々な違いが観察された。例えば，J-L1 でしか使用がないもの（例：駆け足で，小走りに）や，J-L2(e) でしか使用がないもの（例：うれしそうに，はやく）があった。J-L2(e) では，SKIP という様態を「うれしそうに歩いた」と表現しているものもあり，誤用ではないが，様態を表すために J-L1 には見られない副詞的要素を用いる傾向が見られた。

様態を表す副詞的要素の言語形式についても，J-L1 と J-L2(e) では異なる傾向が見られた。表 6 に様態を表す副詞的要素の言語形式別の延べ使用回数と割合をまとめる。

表 6　様態を表す副詞的要素の各言語形式の延べ使用回数と割合
（27 場面合計）（日本語）

言語＼形式	副詞・副詞句	後置詞句	合計
J-L1	18（27.3%）	48（72.7%）	66（100%）
J-L2（e）	51（78.5%）	14（21.5%）	65（100%）

表 6 を見ると，用いられる言語形式には大きな違いがあることがわかる。J-L1 では後置詞句が多く，「スキップで」「駆け足で」「小走りで」のような表現が見られた。一方，J-L2(e) では副詞や副詞句の使用が後置詞句よりも多く，J-L1 とはっきりと逆の傾向が見てとれ，そこには有意差が観察された（$\chi^2 = 32.399, \mathrm{df} = 1, p < 0.001$）。

J-L2(e) の様態を表す副詞的要素の使用においては，「うれしそうに」のような表現が多かったが，「はやくに」，「うれしくに」のような語形の間違いが見られた。どちらも特定の参加者の間違いではあるが，日本語の副詞的要素には形容詞を活用した形式を用いるという複雑さがあるため，誤用が見られたと考えられる。しかし，そもそも語形の間違いがなくても，当該場面の表現として，「#はやく行った」「うれしく歩いた」は不自然であり，J-L1 での使用は見られなかった。同様に，J-L2(e) で 13 例見られた「うれしそうに／うれしげに」のような表現は，J-L1 での使用はなかった。これらは，（24）のように，どれも SKIP 場面で用いられており，「スキップ」という語がわからず「うれしそうに飛ぶ」のような表現をしているのだと考えられる。RUN 場面において，「走る」や「駆ける[8]」を用いずに，「はやくのぼる」「はやく行く」のように表現している例（6 例）があったことも，学習者特有のストラテジーと言えよう。

（24） 友達が外から休憩所の中にうれしそうに飛んできました。

（J-L2(e), |TO.IN × SKIP × ORTHOG|）

日本語では，なぜ副詞的要素で様態を表すことが多いのだろうか。J-L1 でも J-L2(e) でも，副詞的要素の使用において，様態を表す割合が高いことがわかったが，これは他の要素（動詞など）で様態を表す代わりに使用されているのだろうか。経路主要部表示型言語である日本語では，様態動詞が主動詞として表出されることはほぼないが，従属節として動詞のテ形（例：走って，スキップして）や，ナガラ形（例：スキップしながら）を用いて表される（吉成他 2021 など）。このような動詞的要素と副詞的要素での様態の表出は重複しているのだろうか。

副詞的要素で様態を表し，かつ，移動動詞（様態動詞・経路動詞・ダイクシス動詞）との共起があったものに限定し，考察を行う。そのため対象の回答数は，J-L1 は 63，J-L2(e) は 62 となる。1 つの回答において，どのような形の様態動詞であれ，副詞的要素と共に用いられ，重複して〈様態〉が表されるのか（重複表示），副詞的要素のみで表されるのか（単独表示），2 つのパターンが考えられる[9]。重複表示の例は，（24）の「うれしそうに**飛んで**」，（26）の「かなり早く**走って**」のようなものであり，単独表示の例は（25）のようなものである。それぞれの表示パターンの使用回数と割合を表 7 にまとめる。

（25） 友人がスキップで休憩所に入っていった。 （J-L1, |TO.IN × SKIP × ORTHOG|）

（26） 友達はかなり早く**走って**私の前の階段をのぼりました。

（J-L2(e), |UP × RUN × ORTHOG|）

[8] J-L1 では「駆け込む」「駆け上がる」のような複合動詞の前項としての使用が多かった。

[9] J-L1 では見られなかったが，J-L2(e) では，「彼はしっかり階段をたたっとあがりました」のような副詞的要素が重複しているものが 3 例見られた。このような場合は単独表示とし，副詞的要素が様態動詞と共起しているものを重複表示として数えている。

表 7　様態を表す副詞的要素の各表示パターンの延べ使用回数と割合
（27 場面合計）（日本語）

パターン／言語	重複表示（様態動詞あり）	単独表示（様態動詞なし）	合計
J-L1	13（20.6%）	50（79.4%）	63（100%）
J-L2(e)	27（43.5%）	35（56.5%）	62（100%）

結果を見ると，J-L1 は単独での使用が多いが，J-L2(e) は重複での表示も同程度にあることがわかる。つまり，副詞的要素を使って様態を表すのは，J-L1 では（27a）のように，単独で様態を表していることが多く，J-L2(e) では（27b）のように，様態を複数の位置で表すことが J-L1 よりも多かった。これは E-L1 がより出来事を詳細に述べるために様態動詞と副詞的要素の二箇所で〈様態〉を表示していた傾向（表 5 参照）が，第二言語においても見られた結果だと考察される。

（27）　a.　友達が駆け足で階段をのぼっていった。　（J-L1, |UP × RUN × AWY-FRM-S|）
　　b.　友達がゆっくり私のところへ**歩いて**きた。　（J-L2(e), |TO × WALK × TWRD-S|）

このように副詞的要素を観察すると，J-L2(e) は，移動の様態をより詳細に述べるために副詞的要素も使用する傾向があることがわかる。これは，母語である英語の影響と考えられる。

しかし，様態の重複表示に関しても，学習者ならではの傾向があることに注意しなければならない。例えば，J-L1 では SKIP の概念を（25）のように「スキップで」と単独で表示するところを，J-L2(e) では（28）のように，「うれしそうに歩いて」と様態が重複して表示されている。つまり，学習者の様態の重複表示は，1 つの概念を表す語彙がわからず，既知の語彙を組み合わせた表現による可能性も考えられる。このような表現は，重複表示の 27 例中 15 例見られた。

（28）　友達は階段をうれしそうに**歩いて**あがっていった。
（J-L2(e), |UP × SKIP × AWY-FRM-S|）

以上，副詞的要素を観察すると，まず注目されるのは，J-L1 に比べ J-L2(e) ではその使用が有意に多かったことである。これは，J-L2(e) では，〈様態〉だけでなく，〈場所〉や〈時間〉などの概念を表すものの使用が要因としてあげられる。また，最も使用の多かった〈様態〉の副詞的要素において，J-L1 とは異なる言語形式（副詞・副詞句の使用）や，動詞との共起パターン（様態の重複表示）が見られたが，これらはそれぞれ，学習者特有のストラテジー，母語の影響の結果として考察された。

4.4 学習者特有の言語化傾向

最後に，ここまでに見てきた日英語両学習者の特徴を比較する。英語学習者は，副詞的要素の使用頻度は母語話者と有意な差がないものの，使用する形式が限定的であること，そしてそれが表す意味概念と使用の目的においても英語母語話者との差が見られた。日本語学習者は，使用頻度が日本語母語話者よりも有意に高く，それらが表す意味概念にもバリエーションが見られた。

そして，使用する副詞的要素の形式において日本語母語話者と逆の傾向が観察された。本節では，学習者間に共通する特徴と，母語の影響について議論する。

まず，学習者に共通して観察された特徴を見ていきたい。1 つが，〈場所〉を表す副詞的要素の占める割合の高さである。項ではない場所句は，副詞的要素として，様々な事象や状態を表す文に生じることができる。そのため，学習者は比較的早く習得し，自由に産出することが可能であると考えられる。それに加え，〈場所〉を表す副詞的要素は，UP 場面で使用が多く，そこには UP 経路を学習言語で適切に表出できていないという学習者の現状がある。〈場所〉を表す副詞的要素の多さの背景には，「階段」を場所句として表出することで，少しでもそれを補おうとする学習者のストラテジーが，要因として存在すると考えられる。これには UP 経路の特徴も関係している。E-L2(j) では *up* が目的語を取ることを習得できずに場所句を使い，J-L2(e) では「上がる」を主動詞とする場合，ヲ格（目的語）で経路を表すことを習得できずに場所句を使う。UP 経路における通過領域自体が，学習者にとって経路句として表現しにくいものであり，場所句としての表現につながっていると考えられる。

もう 1 つの共通点は，限られた副詞的要素を用いて，移動事象概念を表現しようと工夫している点である。E-L2(j) では上方向への経路を表現しようとして〈場所〉を表す前置詞句を用いる傾向が，J-L2(e) では様態を詳述するために，副詞的要素を用い重複表示する傾向が見られた。英語と日本語では副詞的要素で表出しようとする意味概念の種類は異なるが，中級レベルの学習者が限られた既知の語彙を用いて，移動事象を描写しようとするストラテジーはどちらの学習者にも見られた。

学習者間の差として注目されるのは，J-L2(e) の副詞的要素の使用頻度の高さであり，J-L1，E-L1 を含めても突出していた。これはなぜだろうか。表 2 を見ると，特に，J-L2(e) で〈様態〉を表す副詞的要素の使用頻度が高い。日本語は主に，〈経路〉を（準）主要部で，〈様態〉を主要部外要素で表すパターンを取り，主要部外要素の中でも，副詞的要素（例：スキップで，ゆっくり）よりも，従属節（例:走って，スキップしながら）や，複雑述語や複合動詞の前項（例:**走って**入った，**駆け**上がった）で表すことが多い。日本語学習者にとって動詞の活用などを伴う後者の方法は難しく，単独の主動詞（例：走った，スキップした）で〈様態〉を表示することが多い（吉成他 2021）。本稿で副詞的要素に注目することによって，日本語学習者は動詞を活用させる必要のない副詞的要素を用いて〈様態〉を表出している傾向があることがわかった。さらには，〈様態〉を詳細に述べるという母語である英語の傾向が，第二言語である日本語での描写においても現れ，そのため副詞的要素も用いた重複表示を行っていたと考えられる。

5. 結論

4 節の結果から，日英語の移動事象を描写する表現において副詞的要素で表されたものを観察することで，学習者の言語化傾向の特徴がわかった。共通して見えたのは，UP 経路の経路句としての表現のしにくさが，場所句としての表現につながった可能性である。E-L2(j) では，副詞的要素の使用の大部分が〈場所〉を表すものであったが，この中には，〈経路〉を表そうとした

と考えられるものも含まれていた。J-L2(e) でも同様に，場所句を使い〈経路〉を表そうとしたと考えられるものが含まれており，使用可能な要素でできる限り表現しようとする学習者特有のストラテジーが共通して観察された。

副詞的要素の分析からは，その使用頻度や，副詞的要素を用いてどのような意味概念をどのくらい表現するかについて，英語か日本語か，母語か学習言語かで差が見られた。英語母語話者は母語（E-L1）であれ，学習言語（J-L2(e)）であれ，副詞的要素を使用して出来事を詳細に述べようとする傾向があり，これは，2.1 節で触れた，学習者に共通して観察される簡略化や省略とは逆方向の特徴である。一方，日本語母語話者は，母語（J-L1）では〈様態〉を表す副詞的要素を主に使用していたが，この傾向は，学習言語（E-L2(j)）では観察されなかった。

このように，副詞的要素を見ることで，移動事象を描写する際，何に着目し，何を言語化するのかという点に言語間で差が観察された。日本語母語話者の日本語・英語，英語母語話者の英語・日本語を複合的に比較し，分析した結果，話者の事態認識の差である可能性と，英語母語話者ではそれが第二言語にも影響を与えている可能性が示唆された。これらの結果は，英語と日本語という 2 つの言語について，母語話者の表現とそれぞれを学ぶ学習者の表現を複合的に比較したからこそ見えたものである。副詞的要素の分析が言語間の差異のさらなる解明につながる可能性と，移動表現の第二言語習得研究への新たな知見をもたらす可能性が示唆された。特に，各言語において，主要部外要素の中でもどのような差が見られるのか，移動事象の種類にかかわらず，どのような要素を表出する傾向があるのかなど，さらに明らかにする必要があり，今後の課題である。

参照文献

Bohnemeyer, Jürgen, Nicholas J. Enfield, James Essegbey, Iraide Ibarretxe-Antuñano, Sotaro Kita, Frederike Lüpke and Felix K. Ameka (2007) Principles of event segmentation in language: The case of motion events. *Language* 83(3): 495–532.

Cadierno, Teresa (2004) Expressing motion events in a second language: A cognitive typological perspective. In: Michel Achard and Susanne Niemeier (eds.) *Cognitive linguistics, second language acquisition, and foreign language teaching*, 13–49. Berlin: Mouton de Gruyter.

Cadierno, Teresa and Lucas Ruiz (2006) Motion events in Spanish L2 acquisition. *Annual Review of Cognitive Linguistics* 4: 183–216.

Cadierno, Teresa and Peter Robinson (2009) Language typology, task complexity and the development of L2 lexicalization patterns for describing motion events. *Annual Review of Cognitive Linguistics* 7(1): 245–276.

藤本和子（2017）「日本人英語学習者のモダリティ表現の使用について―“certainty” と “doubt” を表す副詞―」『英語英文学研究』81: 93–106. 創価大学.

藤本和子（2018）「日本人英語学習者の「主張の制限」を表す副詞（句）の使用について」『英語英文学研究』83: 1–16. 創価大学.

藤本和子（2020）「アカデミックライティングにおける日本人英語学習者の頻度を表す副詞の使用について」『英語英文学研究』86: 1–13. 創価大学.

Hendriks, Henriëtte and Maya Hickmann (2011) Expressing voluntary motion in a second language: English learners of French. In: Vivian Cook and Benedetta Bassetti (eds.) *Language and bilingual cognition*, 315–339. Hove, UK: Psychology Press.

胡　娜（2020）「第二言語としての日本語の副詞習得に関する研究の概観及び今後の展望」『言語・地域文化研究』6: 589–603.

Ibarretxe-Antuñano, Iraide (2009) Path salience in motion events. In: Jiansheng Guo, Elena Lieven, Nancy Budwig, Susan Ervin-Tripp, Keiko Nakamura and Şeyda Özçalışkan (eds.) *Crosslinguistic approaches to the psychology of language: Research in the tradition of Dan Isaac Slobin*, 403–414. New York / London: Psychology Press.

Inagaki, Shunji (2001) Motion verbs with goal PPs in the L2 acquisition of English and Japanese. *SSLA* 23: 153–170.

稲垣俊史（2010）「中国語話者による日本語の移動表現の習得について―英語話者と比較して―」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号 : 28–40. 中国語話者のための日本語教育研究会.

影山太郎（編）（2009）『日英対照　形容詞・副詞の意味と構文』東京：大修館書店.

古賀裕章（2016）「自律移動表現の日英比較―類型論的視点から―」藤田耕司・西村義樹（編）『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ―生成文法・認知言語学と日本語学―』219–245. 東京：開拓社.

古賀裕章（2017）「日英独露語の自律移動表現：対訳コーパスを用いた比較研究」松本曜（編）（2017），303–336.

Koga, Hiroaki (to appear) Motion event descriptions in Japanese. In: Yo Matsumoto (ed.) (to appear).

松本曜（1997）「空間移動の言語表現とその拡張」中右実（編）『日英語比較選書 6：空間と移動の表現』第 II 部，125–230. 東京：研究社.

松本曜（編）（2017）『移動表現の類型論』東京：くろしお出版.

松本曜（2017a）「移動表現の類型に関する課題」松本曜（編）（2017），1–24.

松本曜（2017b）「英語における移動事象表現のタイプと経路表現」松本曜（編）（2017），25–38.

松本曜（2017c）「日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現」松本曜（編）（2017），247–273.

Matsumoto, Yo (2018) Motion event descriptions in Japanese: Typological perspectives. In: Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese contrastive linguistics*, 273–289. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton.

Matsumoto, Yo (ed.) (to appear) *Motion event descriptions from a cross-linguistic perspective: Case studies*. De Gruyter Mouton.

仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』東京：くろしお出版.

Ogata, Takashi and Koichi Kawamura (2014) Asian learners' common overuse/underuse of basic prepositions and *-ly* adverbs: A study based on the ICNALE. *Learner Corpus Studies in Asia and the World* 2: 349–359. Kobe University.

大関真理（1993）「日本語学習者用教科書の副詞語彙」『言語文化と日本語教育』5: 23–34. お茶の水女子大学日本言語文化学研究科会.

Özçalışkan, Şeyda and Dan I. Slobin (2003) Codability effects on the expression of manner of motion in Turkish and English. In: A. Sumru Özsoy, Didar Akar, Mine Nakipoğlu-Demiralp, E. Eser Erguvanlı-Taylan and Ayhan Aksu-Koç (eds.) *Studies in Turkish linguistics*, 259–270. Istanbul: Boğaziçi University Press.

朴秀娟（2019）「初級日本語教科書における副詞の導入実態について」『神戸大学留学生教育研究』3: 21–34. 神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター.

朴秀娟（2022）「日本語教科書における副詞の扱いについて」『神戸大学留学生教育研究』6: 23–47. 神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター.

Slobin, Dan I. (1996) From 'thought and language' to 'thinking for speaking'. In: John J. Gumperz and Stephan C. Levinson (eds.) *Rethinking linguistic relativity*, 70–96. Cambridge: Cambridge University Press.

Slobin, Dan I. (2004) The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In: Sven Strömqvist and Ludo Verhoeven (eds.) *Relating events in narrative, vol.2: Typological and contextual perspectives*, 219–257. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Slobin, Dan I., Iraide Ibarretxe-Antuñano, Anetta Kopecka and Asifa Majid (2014) Manners of human gait: A crosslinguistic event-naming study. *Cognitive Linguistics* 25(4): 701–741.

Spring, Ryan and Kaoru Horie (2013) How cognitive typology affects second language acquisition: A study of Japanese and Chinese learners of English. *Cognitive Linguistics* 24: 689–710.

Talmy, Leonard (1991) Path to realization: A typology of event conflation. *BLS* 17: 480–519.

Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics: Vol. II: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.

Tanigawa, Mizuki, Ryosuke Takahashi and Yo Matsumoto (to appear) Motion event descriptions in English, German, and Norwegian. In: Yo Matsumoto (ed.) (to appear).

Taremaa, Piia and Anetta Kopecka (2023) Speed and space: Semantic asymmetries in motion descriptions in Estonian. *Cognitive Linguistics* 34(1): 35–66.

吉成祐子（2017）「言語使用の観点から見た移動表現の類型論：日本語・英語・イタリア語話者の主体／客体移動表現」西原哲雄・田中真一・早瀬尚子・小野隆啓（編）『現代言語理論の最前線』216–230. 東京：

開拓社.
吉成祐子・アンナ・ボルジロフスカヤ・江口清子・眞野美穂（2020）「複数局面ルートの移動事象を描写する表現の類型論的分析」松本曜教授還暦記念論文集刊行会（編）『認知言語学の羽ばたき』22–38. 東京：開拓社.
吉成祐子・眞野美穂・江口清子・松本曜（2021）『移動表現の類型論と第二言語習得：日本語・英語・ハンガリー語の多元的比較』東京：くろしお出版.

Characteristics of L2 Learners' Use of Adverbial Elements in English and Japanese: Focusing on Verbalization Patterns in Motion Event Descriptions

MANO Miho[a] YOSHINARI Yuko[b]

[a]Osaka University / Project Collaborator, NINJAL
[b]Gifu University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract
It has been pointed out that "thinking for speaking" (Slobin 1996) in L1 influences second language acquisition regarding what is verbalized when describing motion events. This study compares the use of adverbial elements by L1 speakers and learners of Japanese and English based on data obtained from a language production experiment describing motion events, explores the characteristics of each speaker group, and examines the factors that influence their expressions. Analyzing adverbial elements bidirectionally, we found that English speakers tend to describe the manner of motions in greater detail using adverbial elements in both L1 (E-L1) and L2 (J-L2(e)), and that English and Japanese learners have common learners' strategies. The results suggest that the analysis of adverbial elements may lead to further clarification of speakers' conceptualization of events.

Keywords: motion event description, conceptualization of events, adverbial elements, second language acquisition